

〔創立50周年記念国際シンポジウム講演〕

国際化時代における高等教育の役割：いかにグローバル人材を育成するか

経営ビジネス学科  
河 知延

世界経済は急激にグローバル化の程度を深化させている。IT技術の進展に伴い諸外国の情報を驚くほど素早く、正確に、かつ、膨大な量を安価に手にできるようになったことは、より多くの国々のモノ、金、人、組織、情報による国を跨った移動を促している。日本に目を向けると、企業が複数の国々で事業活動を行ったり進出拡大を考慮したりすることはもはや大企業だけの問題でもなく、業種によって限られる問題でもなくなっている。同時に、日本国内においても外国発の企業や製品、サービスに溢れかえるだけでなく、観光や就労、就学を目的として来訪する外国人の数が急激に増えている。今後は異文化のバックグラウンドを持つ同僚と協調しながら国内外で活躍する人材が求められるだろうと予想できる。そのために、グローバル社会をリードできる人材の育成、グローバル感覚の涵養こそが現在の大学に求められる役割の一つであると言える。

近畿大学の全学的な取り組みとは別途に産業理工学部においても国際化教育のための基盤づくりを進めてきた。各学科と教養・基礎教育部門でのグローバルプログラムの導入、グローバル教育を強化したカリキュラムへの改組、英語科目の強化等は然る事ながら、学部単位においても海外協定大学を拡充し、留学生受け入れ態勢を整備、また、国際交流委員会を発足した。とは言え、ようやく国際化教育に向けて動き出した所であり、残された課題は多い。

2015年6月4日に、本学部の創立50周年記念事業を行った際、国際交流委員会主催で海外協定大学の代表と本学の代表も交え国際シンポジウムを開催した。テーマは、「国際化時代における高等教育の役割…いかにグローバル人材を育成するか」であったが、本学部のこれからの姿に必要な情報を得る上でも、また、海外協定大学との今後の相互協力を再確認する上でも有効なものとなった。この国際シンポジウムには、本学部と特に活発な交流を行っている3つの協定大学の代表である、ベトナムのタイグエン農林大学国際研修開発センター長、台湾の虎雄科技大学学長、韓国の東西大学総長に加え、本学の代表である近畿大学国際交流センター長を招き、同テーマによる講演とパネルディスカッションを行った。

このシンポジウムを通して各国における大学を取り巻く環境はいずれも国際化教育を急激に進めさせるものとなっており、同じ課題に直面していることを改めて確認することができた。それらの社会のニーズを満たすべく取り組んでいるグローバル人材育成のための様々なプログラムや施策は目覚ましく、かつ、画期的なものばかりであり、本学部の国際化教育の発展に寄与する多くのヒントや知見を含んだものであると言える。以下では、その講演の内容を記載している。



タイグエン農林大学国際研修開発センター長、Jong Thi Bon Tho博士（ベトナム）

おはようございます。タイグエン農林大学を代表し、タイグエン農林大学の職業専門教育を中心に、高等教育による労働市場統合の背景から説明させていただきます。

まずご紹介したいのは、大学卒業後の学生で就職できない学生の数が増えていることがベトナムでは大変深刻になっているということです。学士や修士の称号を取った大学卒業生、そして大学院卒業生であっても就職できません。その数は2014年には16万2,000人、そしてこれには議会からの批判の声が大きくなっていて、卒業生が雇用主のニーズを満たしていないことを示しています。

まず1つ目の理由として、高等教育と就業時指導の関係が限られており、大学でのトレーニング、カリキュラムと労働市場が求めているニーズとの間にかい離があるということです。2つ目の理由は、大学での教育が受身的な指導スタイルを取っており、教授から学生へのトップダウン方式、また、学生の方は受け身で教育を受けているということです。3つ目は、教育のカリキュラム自体が、市場が求めていることと離れているということです。理論を重視するばかりで、実践が軽んじられていることで、学生を即戦力に育て上げることができていません。また4つ目として、近年ベトナムは国際化が進んでいますので、その国際化の市場の中で活躍できるような人材が求められています。専門知識もそうですが、外国語の習得や国際市場で活躍できるだけの器量を身に付けるということも求められています。5番目になりますが、他のニーズに因應するために大学はたくさん課題に直面しております。まずそういった資質を備えた教育体系の教

授陣が不足しています。また実際の経験も不足し、資金面や技術面でも課題に直面しています。

ですから、大卒者もこの新しい労働市場の求めるニーズに応えることができていません。即戦力を持っていません。また、専門的な知識や就業経験がありません。文法が重視されるような外国語教育ですので、コミュニケーションとしての外国語能力を備えていないということです。ですから、新しい労働市場のニーズに応えるために、早急に改革を行わなければいけないというのが、今、ベトナムとベトナムの大学が抱えている緊急の課題となっております。

2005年にベトナムの文部省は、新しい実学重視の高等教育、POHE (Profession-Oriented Higher Education) と呼ばれるプログラムを発足しました。このプログラムに基づきまして、企業が学生のトレーニングプロセスに積極的に関わるようになりまし。またOJT (On-the-Job Training) ということで、職場経験等で積極的に学生を迎え入れるようになっております。そして2013年から2015年の間に、最初は9つのトレーニングプログラムだったのが現在では50となり、農業、語学、ビジネス、経営など8つの大学で繰り広げられています。POHEモデルではすでに1万人を超える学生がトレーニングを受け、4,800人を超える学生が卒業しております。その卒業生の98%が卒業して1年以内に就職できています。これは2020年までの教育戦略ですけれども、このような実学重視であるPOHEに80%移行し従来型の研究重視は20%にとどめるということを2020年までの目標としております。ですから、大学の教育がこのプログラムを通した即戦力となり得る学生の育成にフォーカスしております。

ここで重要となってくるのが、大学と実業界との強い連携です。この連携はますます強くなっており、カリキュラムの構築等も、実業界の協力を取り込み新しく労働市場で求められるニーズに応えられるような形態の人材育成に充てております。

そこで私どもの大学で行っている試みですが、2005年にタイゲン大学では学士のトレーニングプログラムとして指定され、農学部でトレーニングプログラムを1つだけPOHEのモデルに移行しました。300人を超える卒業生を出してございまして、この卒業生たちは、就職を容易に見つけることができました。2015年には、さらに5つの学習プログラムをPOHEモデルに移行しました。企業の雇用主と色々なことを相談してカリキュラムを選んだ上でアドバイスももらいました。このように企業からもたくさん協力を得てございまして、30を超える国の企業が実際に資金面や技術面で支援してくださっています。タイゲン大学ではPOHEプログラムに500人を超える学生が毎年入学しております。なので、この卒業生たちは支援してくださる企業に就職する

ことになりました。

それからまた国際経験を積むプログラムも開設しております。学生は6カ月から18カ月の間、色々な海外の企業や農園で実際の実務経験を積みまます。アメリカ、イスラエル、そして最近では日本でもこのOJTプログラムが開始されました。この海外でのOJTに参加する生徒は毎年250名から300名で、アメリカ、イスラエル、日本で学んでおります。それに応えるために、また、海外市場のニーズに応えるために、以前は英語に特化した外国語教育だったのが今では英語に加えて日本語、韓国語にも力を入れております。

イスラエルで行われているOJT、職場経験、職務経験では年間150人の学生が参加しております。10カ月から11カ月の間、実際の職場の経験とともに国際交流や色々な経験を積んで、終了時には修了証が授与されます。その中には文化交流の機会も活発に行われてございまして、直に現地の方と接することによってコミュニケーション能力、そして外国語能力も格段に向上します。アメリカでのOJTの経験では70名から100名の学生が毎年参加しております。全体の職場の経験、職務経験もそうですけれども、ミネソタ大学での研究、勉強という機会も与えられます。これを終了しますと認定証が授与されます。職務経験に加えまして、このように国際的な文化交流の機会や語学研修も受けられるということです。語学の能力もまた各段に向上いたします。

ごく最近開始されたのは日本でのOJTトレーニングです。ここで職務経験を積みむことができますし、日本語の語学研修のプログラムを始めております。近年、多くの日本企業が投資先としてベトナムを選んでおりますので、そのニーズに応えるためにも日本との関係強化にも努めています。今年が初年度ということで試験的に50名の学生を取りましたけれども、将来的にはもっとこの数を、日本向けのOJTクラスで増やしていきたいと思っております。

これで最後になりますけれども、これからもこの実学重視の教育を進めていきたいと思っております。それは大学生の国内外での就職率を向上させるためです。また大学と企業が連携し、企業での経験を学生に積んでもらう職場でのトレーニングを開発してまいります。また、外国語教育の充実と即戦力のスキルを伸ばすということで、以前は英語に特化してございまして、今では英語、日本語、韓国語を重視しております。学生の方も大学で英語、日本語、あるいは韓国語がすっかり学べる所として大学を選ぶ傾向になってまいります。また、大学教育におきましては、ITスキルやコミュニケーション能力、チームワークスキルなどのカリキュラムの方も充実させてまいります。

そして、これはとても大事になりますが、国際的な協力を得るといことです。これ

は専門知識、スキル、外国語能力、外国での国際経験を豊かに積んでもらうために海外との協力体制を拡大する必要があります。この海外でのOJTトレーニングのプログラムは、これまでは10%の学生が参加するにとどまっていたましたが、これからはタイグエン大学の在籍学生の6割から7割がこの海外での6カ月から18カ月のOJTトレーニングに参加するように送り込みたいと考えております。新しい大学の規定ですが、この海外でのOJT、実務経験のトレーニングに参加した生徒は研究論文を書く10単位が免除されます。つまりOJTが10単位に相当するように大学の規約が改定されました。

また、タイグエン大学の方でも積極的に国際理解を進め、留学生を1ないし2年間で迎え入れて、大学内に国際的な環境を作り出すことにも努めたいと思います。学生が海外に行って語学研修を積み海外の大学を卒業し大学院に進学する上での支援も行っています。海外とのJoint Degree Training Programのモデルとして、1プラス3や2プラス2がありますが、1プラス3というのは1年間タイグエン大学、このベトナムでのキャンパスで学んだ後、3年間は海外のキャンパスで学ぶというものです。ありがとうございます。

虎尾科技大学学長、ウエンユー・ジユエ博士（台湾）



この度お招き頂きましてありがとうございます。学長をはじめ、近畿大学の関係者の皆さん、そしてお集まりの皆さん、どうもありがとうございます。私の大学と台湾の大学では専門教育をどう向上させていくかについてお話しいたします。まず、台湾の高等教育のシステムについてご紹介した後、今抱えている課題や虎尾科技大学がどのように改革に臨んでいるのか、また、インダストリー4.0についても話したいと思います。

台湾には約160の大学がありますが、71が一般の大学であって、そして工業、テクノロジーに特化した大学が88あります。台湾の高等教育が現在抱えている課題とは、産業との関係についてです。産業とどのように大学教育を統合していくのか、特に台湾国内の産業とどのように統合関係を構築していくかということです。

まず私どもの大学の位置ですが、台湾のちょうど中央に位置しています。台北と高雄、北と南のちょうど中間に位置しております。もし日本から訪れるのであれば、まず飛行

機に乗り、台湾の空港から新しく高速の新幹線ができていますのでそれに乗っていただくと、大体70分ぐらいで駅に到着します。今のキャンパスはこの高速鉄道の駅から車で10分ぐらいですが、現在建設中の新しいキャンパスですと、この駅から歩いて10分で到着します。

設立時の1980年には大きく電機、工学、そして経営をはじめとした4つの学問分野でした。科学技術が主体であり、工学系が主になっております。工学系の教授陣が150名を超えており、そこで学んでいる学生数も6,000名を超えています。そしていくつかりサーチセンターがありますが、これらの研究センターは全て企業との共同で設立されています。また、精密機械の分野、バイオテクノロジー、最先端の技術分野の研究も含んでいます。そして文部省だけではなく、通産省それから科学技術省とも緊密な連携を取っております。一般の特許の獲得数は国内第7位であり、492件とトップクラスです。企業への技術移転の数は584件で国内第4位です。また、活発に国際交流、留学生の交換留学プログラムも行っています。

そして虎尾科技大学の卒業生は、台湾の工学系の中では一番の就職率を誇っています。またプログラムも経済部によって資金援助を受けているプログラムです。ドイツ、アメリカ、日本でも、このインダストリー4.0などのような大々的なプログラムを行っています。台湾でもこれをProductivity 4.0と名付け活発に行っています。このProductivity 4.0は、産業界との連携が一番大事になりますが、それ以外にも外国との国際協力、それからまた様々な状況を巻き込んだ政府も関係しています。もちろん、アカデミックの側面でも大きく関わっています。

10億米ドルという大変多額な資金を投資して、大学の研究分野と実際の産業との間のギャップを埋めるために、色々なテクノロジーギャップの調査を行っております。これは機械工学の分野で行っている例を示しております。その予算の25%、4分の1に相当する金額が学生に奨学金として支給されています。このプロジェクトに関わっている学生の数が1,000名を超えており、私とその責任者となっております。

実際に行われている授業内容ですが、国境を超えた産学官連携プロジェクトである研究プロジェクトとジョイントリサーチプロジェクトを、国境を越えて行っております。国際的な産学連携プロジェクトの例ですが、去年にはイギリス、ドイツから企業の担当者を招いて虎尾科技大学の方で学んでいただきました。ハイレベル、ミドルレベル、全てのレベルを網羅したOJT職場体験です。基金は産業界だけでなく政府、国の方からも資金援助を獲得しています。国際的に活躍できる人材を育てていくという大きな目標を持っています。

労働市場や国際市場のニーズに応えるような学生を育てるために、カリキュラム構築においても企業からの協力を得ています。これを機能させるメカニズムですが、最初に企業の方でどういった連携が求められているのかという企業のニーズを明らかにしてもらいます。その上で企業と大学が一緒になってそのニーズに応えるようなカリキュラムを構築するために、従来のカリキュラムを改定、または改善することになります。今度企業と大学が学生を集めます。企業は半ば強制的に一部の従業員をこのプログラムで学ばせませんが、企業に戻ってからは高級人材として働いてもらいます。ですから、企業の方はアシスタントシブとしての援助ももちろんですが、インターンシブの機会も提供しております。また国内での雇用の機会も提供してくれています。

現在このプログラムを導入して3年目になります。今のところの実績では100万米ドルが産業界の方から支援してもらっています。この100万ドルが学生の奨学金として充てられておりますが、将来的にはこの金額が10倍になればと思っています。ご清聴、どうもありがとうございました。

東西大学総長、ジェクック・チャン博士(韓国)



皆さん、おはようございます。私は韓国釜山から来ましたチャン・ジェクックと申します。まずは近畿大学産業理工部の50周年、本当におめでとうございます。また塩崎学長、荒川学部長、貴重なところに招いていただきまして、本当に感謝いたします。

東西大学は韓国釜山にある大学ですけれども、皆さん、釜山はご存じだと思います。釜山と福岡の間には飛行機がたくさん飛んでいまして、去年も福岡に来ています。飛行機に乗りますと、ご存じのように35分かかります。35分というのは、オレンジジュースも飲めないぐらいの距離です。入国審査に35分かかります。飛行機が35分で、入国審査が35分ということで、短い時間です。

私は小さい時、釜山に住んでいましたが、昔の韓国は非常に貧しかったので、電気を節約するというところで、朝から夜までは全然テレビ放送がありませんでした。夜6時からテレビ放送が始まります。釜山は日本のテレビが普通のアンテナで入りますが、私は

小さい時にいつも日本のテレビを見ていたのですけれども、どういう意味か全然知らなかったのですが、大学に行って日本語を勉強したらやっと分かるようになりました。そういう経験があります。釜山というのは韓国の中で一番日本に対して親近感を持っている所でありまして。多分、韓国に対して一番親近感を持っているところが九州ではないかと思っています。

東西大学は1992年に設立された比較的新しい大学です。元になる東西学園という財団の中に3つの大学があります。その一つが慶南情報大学という1965に設立された大学でこれは50年以上の歴史を持っている大学です。私が属している東西大学は92年ということで、まだ比較的若い大学です。16の学部、73個の専攻を持っている総合大学であります。今、学生数は1万2,000人で大学院と博士課程も持っています。

設立当時から、東西大学はいつも戦略を立てています。今まで3つの柱を守ってきています。1つは国際化です。2番目は特性化、3番目は情報化という3つの柱で走っています。特性化とは、16の学部がありますが、その中で5つの学部を集中して育成するというところで、集中して投資をしています。その5つの分野の選択ですが、基本的に未来の産業との繋がりを考えました。もう一つは地域の発展と連携していくということで、国際化分野を選びました。ご存じのように釜山は映画で有名ですね。釜山国際映画祭がありますけれども、釜山は映画産業を育成していくという戦略があります。東西大学も映画、映像というところを特性化分野として選びました。もう一つはデザインです。IT、それからリーダーコンテンツというゲームなどの分野です。それと東西大学は釜山にあり日本と一番近いということで、日本研究に力を入れています。韓国では日本研究センターと言えば、東西大学が大きな競争力を持っているという評価を受けます。この5つの分野を特性化分野と呼んで集中的に考えています。この特性化の大事なところは、その分野に競争力を付けるということが一番大事だと思います。比較的新しい大学ですから、全ての分野をトップにするというのは非常に難しいと思います。その中から5つの分野を選んで集中して育成することによって、国際化にも役に立つということになると思います。

今から国際化について説明します。我々の国際化の戦略には、3つの目標があります。1つは全世界に通用する人材育成です。釜山にある大学ですが東西大学を卒業し釜山だけに通用する人材を育成したくない、あるいは韓国だけに通じる、そういう人材の育成をしたくないということです。全世界を舞台にして活躍できる人材を育成したいというのが目標の1つ目です。2つ目の目標とは、東西大学を真のグローバルキャンパスにしたいということです。東西大学の正門に入った瞬間、国際化されたキャンパスを作るの

が目標です。海外に行かなくても、東西大学に行ったらもうすでにグローバルを感じられる、そういう経験ができる大学にしたいというのが2つ目の国際化の目標です。3つ目は実践です。実践の国際協力です。あるいは国際産業、産学連携です。日本の大学も同じだと思いますが、韓国の大学も非常に財政的に難しくなっています。国内での産学連携は大事だと思うのですが、海外でも産学連携をして人材を育成して、それを国にまた再投資するというふうな目標を持っています。これは具体的にまた説明します。

東西大学は現在、37カ国176の大学と姉妹関係を結んでいます。現在、うちのキャンパスに800人の外国人留学生が来ています。色々な国から来ていますが、中国、台湾、後は、日本はもちろんですが、リトアニア、ウズベキスタンとかインドネシア、マレーシア、ベトナムを中心に27カ国から学生が来ています。

国際化の特色をいくつか説明したいと思います。まず1つは、海外にキャンパスを構築するという事です。今すでにアメリカと中国にはキャンパスを作っています。アメリカの場合はカリフォルニアにあるロスアンゼルスに姉妹校であるホープ・インターナショナル大学という所がありますが、その中の建物を一つ買って分校として使っています。毎年1000人の学生を選んで、1年間分校に送って、午前中は英語を勉強します。午後はそれぞれの専攻分野の1科目を取るとか、あるいは再受講します。東西大学が任命した現地での客員教授がいるのですが、彼らによる授業を受けることになっています。中国の武漢に中南财经政法大学があります。そのキャンパスの中に東西大学が投資をして建物を一つ作りました。そしてそれをうちのキャンパスとして使っています。ここにも100名の学生を1年間送りまして、午前中は中国語を勉強し、午後はそれぞれの分野でプロジェクトを実行するというふうになっています。海外キャンパスの構築です。

2番目は、アジアプロジェクトです。ご存じのように今からアジアの時代というふうになんて言われています。アジア開発銀行の調査によると、2050年までに全世界のGDPの59%がアジアで作られるというふうな統計の予測が出ています。ということは、未来はアジアにあるということです。だからうちの学生は卒業するまでには、アジアに対する十分な知識と経験を持つのが一番大事だということで、色々なプログラムを実施しています。それを紹介しますと、1つはD A I P、Dongseo Asia Initiative Programといまして、夏休みになると10のチームを組んで10カ国に学生を送っています。例えば、マレーシア、インドネシア、ベトナム、カンボジアなどの10カ国の姉妹校に送ります。寄宿は姉妹校の寮を使いますし、午前中には現地の先生がその国について授業をします。午後には市場調査という形で、現地を調査します。それを3週間やります。現地の

学生とペアで現地を調査しますから友達にもなって仲良くなります。レポートを書いてそれを学生の前でそれぞれ紹介する、発表する機会も設けています。もう1つは、ASPといまして、Asia Summer Programというのがあります。これはアジアそれぞれの国の20の大学と組んだ連合のサマープログラムです。これは移動式キャンパスです。2013年には東西大学は釜山でサマースクールを開催しました。2014年にはマレーシアに移動して、ここでサマースクールの行いました。去年は日本の東京でやりました。それで今年は7月にタイのバンコクで開かれます。11カ国、この20の大学の学生500人ぐらいが4週間一緒に授業をしながら勉強するというになります。また、G A A、Global Access Asiaという、これはMOOC、Massive Open Online Courseといまして、オンラインの公開講座です。これは基本的にはアメリカの大学がやっています。スタンフォードやMITが自分たちの非常に質の高い授業をオンラインで公開して世界の学生が見ることができるような仕組みです。それはそれなのですが、学問の多様化という側面から言いますと、我々は受信だけというのは良くないと思います。アジアの大学も非常に競争力を持っていますから、我々が持っている競争力のある授業を世界に向けて発信することが正解だと思います。そういう意味でアジアの15カ国の59の大学と組んで、去年の8月に釜山でアジア版のMOOC、G A Aを開始しました。皆さん時間がありましたら、[www.gaa.link](http://www.gaa.link)にアクセスすると、すでにアジアの講座がそこにリストアップされておりまして、まだ試験的な取り組みですが、今後これを増やしていくかなと思っています。ぜひ近畿大学もG A Aに参加していただいて、このG A Aのセンターになってほしいと希望しております。

国際化の3番目は、国際化戦略です。海外の学生を誘致するのが非常に大事だと思います。日本と同じですが、人口がものすごく減っています。今、韓国の出生率は非常に低く、1.18です。世界で一番低いのです。このままでは民族がいなくなるという話もあるぐらいです。もう子どもも生まない、結婚もしない、こういう時代を迎えています。今、韓国には199の総合大学、4年制大学があります。在学生を全員合わせると52万人になります。52万人で大学は成り立っていますが、2018年から高校卒業者が51万人になってしまいます。その中で大学に行かない学生もいるでしょう。そうするともっと減ります。実数は低いと言われています。このギャップを埋めるためには優秀な海外の留学生を誘致しなければなりません。ですから、さっきの特性化分野というのは非常に大事だというのは、そういうことです。国際化分野を選んで、集中投資して競争力を付けたいと海外の留学生は来ないのです。ですから、競争力があるというランキングも高くないと、韓国まで来て外国の学生が勉強する必要は全然ありません。そう

いうことでこの5つの分野を重視してやってきました。海外の優秀な学生を誘致するために、東西大学は2プラス2をたくさんやっています。まずはさっきの中国の武漢にある大学と組んで、カタク大学を作りました。カタク大学というのは、2つの学科を中国の文部省から評価をもらって150名ずつの学生を募集する権限をもらいました。5年掛かりました。これは非常に良いのは、中国のセンター試験を通らないとこの大学に入学できないということですから、非常に優秀な学生が集まるということです。2年間そこでアニメーションとゲームの基礎科目を取った後に3年生になると釜山に來ます。これは2プラス2と言います。それとリトアニアという所は、バルト海に面する国ですが、そこでも2プラス2のリーダーコンセプトの学科を作りました。そこは戦略的にいいのは、ポーランドとかエストニアとか色々な国があるので、またそこでも2年間勉強し、残り2年は釜山に來るといことです。こういう仕組みをマレーシア、インドネシア、ベトナム、そういうたくさんの方々の大学と組んで、2プラス2をします。来年あたりになると1,000人の留学生がうちで勉強することになります。

最後に国際産学連携です。先ほどご紹介しました武漢での学生ですが、ここで釜山に來て2プラス2で勉強が終わった後にまた武漢に戻ります。彼らは就職しなければいけません。ゲームの会社ですが、そんなにありません。東西大学がそれを見てアニメーション会社を作りました。そして彼らはそこに就職して、アニメを作って、そのコンテンツを中国の国内で販売します。中国という国は13億の人口がある国です。ですから、そこでヒットすればものすごく売り上げがありますし、それをまた大学に持ってきて役に立つようにしたいということで、国際産学連携というのをしています。

時間の制限がありますので、このぐらいにして私の発表を終わらせたいと思います。今後、近畿大学とも姉妹関係を結んで色々な国際的な連携をしていきたいというふうな希望を持っています。ありがとうございました。

近畿大学国際交流センター長、浦崎直浩教授



近畿大学の国際交流委員会の委員長を務めております。浦崎でございます。所属は東大阪キャンパスの経営学部であります。昨日、新飯塚の駅でお立ち、のがみプレジデントホテルまで歩いていく時に、飯塚市役所に祝近畿大学産業理工学部50周年と書いてありました。産業理工学部が、飯塚市でどれだけ重要な位置を占めているかということを理解した次第であります。

まず最初に、「グローバル人材とは何か」という点であります。これは文科省の関連組織、推進会議が定義をしている考え方でありますが、「世界的な競争と共生が進む現代社会の中で、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立つて培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識」、こういった要素を持った人材がグローバル人材だといふふうに定義をされております。これ以降の話は今の定義、要素を持った人材を前提に話をしていきたいといふふうに考えております。単に経済的な競争に打ち勝つだけがグローバル人材ではなくて、共生社会に対応できる人間でなければいけないということが、先ほどの定義の中でうたわれております。期待される人材像としては、日本人としてのアイデンティティを持つていること、教養と専門性があること、それからコミュニケーション能力、協調性があるということ、それから新しい価値を創造する能力、イノベーション、それに対応する、挑戦する心や姿勢を持っているということ、さらに社会貢献の意識、社会正義であるとか、倫理的である、こういった要素がグローバル人材の要素として考えられると思います。ですからこれが正しいと言いますと、近畿大学として、あるいは各学部として、このような要素に関連した取り組みをし、あるいは組織的にどれだけできているかということが問題になると思います。

さて、このようなグローバル人材を育成する時に、当然問題になりますのは大学の教育の方針であると思います。近畿大学建学の精神は実学教育と人格の陶冶であります。実学教育について、創立者の世耕弘一先生は非常に分かりやすい言葉で説明しております。実学教育というのは、それまでに無かったもの、世の中に無いものを生み出すこ

とである、非常に分かりやすい言葉だと思います。具体的に言いますと、クロマガロの完全養殖、それが代表的なものであります。その他、バイオコークスでありますとか、ウナギやナマス、それからスッポンコラーゲンの化粧品を開発ということ、これまで無かったものを生み出すということが実学教育であるというふうに説明をしています。世の中に無い物を生み出すということは、先端の領域に挑戦をするということ、つまりイノベーションであります。いわゆる競争社会へ対応していくという点です。

それからもう1点、先ほど共生社会に対応できる人材がグローバル人材であるという話をしました。近畿大学の教育の目的は、「愛、信頼、尊敬」を核とする人材育成、教育目的を持っています。まさにこのような考え方は共生社会への対応であると考えております。従いまして、近畿大学でしか学べない教育、研究、設備、環境、こういった中でオンリーワンの教育というのを研究、探求していくことが必要だと考えられます。このような教育を行うに当たって、グローバルな視点から何ができるのかということが、教職員に与えられた課題であるというふうに考えます。例えば、産業理工学部ですと、自然、技術、人文、社会の調和という観点が謳われています。そういった観点からこういったグローバル教育をどのように実践するかということが重要だと考えられます。このような観点で近畿大学がこれまでどのように国際化に取り組んできたかということでもあります。

各学部ではかなり以前から、それぞれ国際交流を進めてきております。近畿大学が全学として取り組み始めたのは比較的最近です。2006年の第一次教育改革から国際化について全学的に取り組んでまいりました。現在は第三次の教育改革の段階に入っております。昨年、2015年3月5日にグローバル推進検討委員会が近畿大学の国際化のビジョンを作成しております。近畿大学は建学の精神である実学教育、人格の陶冶を実践し、競争と共生が求められる現代社会の中で地域社会の中で近畿大学は競って独自の教育研究を通じ、国際的な視野を持ち、主体的に活躍できる人材を育成する地域拠点となります。それから学術、文化、奉仕活動の振興を通じた国際交流拠点となると、こういった方針の元で国際化を進めるということが動きだしております。

このような国際化の定義に基づきまして、ここに示すような7つの具体的な方針があります。グローバル化推進体制を整備する、グローバル教育ネットワークを構築する、複数言語教育を実施する、学生支援により国際交流連携を強化する、海外の大学、教育機関と協定を結んでいきます。それからグローバル企業との連携を強化し、学生の国際キャリア支援を行っていきます。地域社会の国際交流を推進していきます。こういった方針を立てて、それぞれさまざまな策、具体的な施策を進めているところであります。

現状、近畿大学、全学的な取り組み、どのような事を行っているかということですが、他大学と同じように学生の送り出しと受け入れを行っています。学生の派遣プログラムの中には、短期留学、短期研修、国際インターンシップ等々がござりますが、全体で300名を超える学生がこういった制度を利用しています。受け入れにつきましては、交換留学が今年の4月の段階で23名、9月からは35名を受け入れる予定となっております。

それからこの後どうするかということですが、留学プログラムの拡充に向けて海外派遣プログラム、長期、短期を拡充して、海外の会議において交流提携先を探し、交流提携先に学生を送り出すためにTOEFLとかALESの採択クラスを開講していくというものであります。さらに留学生受け入れプログラムを拡充するために、長期、短期、正規留学ですが、中国、韓国、台湾、タイ、ベトナム、マレーシア等で招致活動を行っています。さらに日本語教育に関心のある学生を受け入れるために日本語集中プログラムを作っています。さらに留学生のために夏季入学等々を実施することになります。

最後に、近畿大学が新しく取り組んでいる点であります。2016年4月に国際学部を開設いたしました。国際学部は外国語の高いコミュニケーション能力、幅広い教養を兼ね備えた国際教養人を育成していくということで、今入学をしました500名の学生のうち450名が4月からアメリカの各大学に1年間、留学することになっております。

今後の課題ですが、5月末時点で、国際協定校が176大学あります。さらに協定を増やしていくということ、それから包括的なプログラムが必要だということです。共通教養科目を英語で実施するような授業を増やしていく必要があるだろうというふうに、国際交流、それから国際交流委員会等々で議論をしているところであります。以上で近畿大学の取り組みについてご紹介をいたしました。ありがとうございました。